

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論 一番外編一:

## TOEICを斬る(後編) ~“TOPIC”のススメ~

<http://eetimes.jp/ee/articles/1308/30/news008.html>

今回、「TOEIC」の代替案として提唱するのが「TOPIC (Test of Playing for International Communication)」です。その名の通り、“演技をする(Play)”テストになります。つまり、自分が伝えたいことを、いかに正確にジェスチャで伝えられるかを客観的に評価するわけです。空港に行きたいとき、相手を責めるとき、トイレを我慢しているとき……。あなたはどのようなジェスチャで伝えますか？

2013年08月30日 00時00分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか? →「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

今よりも英語の力が貧弱だった学生時代に、私は、中国、インド、ネパール、タイ、シンガポール、北米、カナダを一人で旅してきました。これらの旅の途中で必要なコミュニケーションは、おおむね達成できたと思っています。何度か命の危険にさらされながらも、日本に帰ってくる事ができたのですから。

一人旅を通じて分かったことは、「海外でコミュニケーションすること」と「英語を使うこと」は、同じではないということです。

□

こんにちは。江端智一です。

前回、[TOEIC \(Test Of English International Communication\)](#) をボロクソに非難しましたが、今回は、その代替テストの提案と、TOEICに関する考察をしてみたいと思います。

### 「英語」とは何なのか

---

まず、「英語」とは何か、について、あらためて考えてみたいと思います。

「英語」とは、英国で使われてきた言語です。いろいろな経緯があって、国際語として認定されている言語ではあるのですが、それは、英語を母国語とする人口が多いから一ではないようです。世界の人口70億人に対して、英語を母国語とする人口は3億~4億人、たかだか5%弱、といったところですよ。

では、日本人を含む、残りの95%の人間にとって、「英語」とは何なのか。

私たち日本人の大半にとって、「英語」とは、携帯電話やスマートフォンと同じ、通信するため

の「道具」であるということです。ならば、「英語を学ぶ」とは、「英語という『道具』の使い方を学ぶ」ということであり、「スマートフォンの操作方法を学ぶ」ということと、基本的に同じと考えてもよいはずで

ここで1つ、仮説を立てて考えてみましょう。



写真はイメージです

「スマートフォンの使い方を習得するのに10年間の学習が必須である」と言われたとしたら、あなたはどのように思いますか。

誰であれ、「それは、『スマートフォン』という道具が悪いよ」「そんなもの使うのやめなよ」と、言うのではないのでしょうか。

同じことです。

学習に10年以上を費やし(私なんか、年齢から12年を引き算した人生の全期間を費やして)、なおかつ日本人の大部分が「使いこなせていない」と感じている道具——。それが英語なのです。

これは、私たちが悪いのでしょうか。

違うでしょう。どう考えたって、その「道具」、つまり「英語」そのものが、そもそも劣悪な不良品であると考えるのが自然です。それにもかかわらず、われわれエンジニアは、このような不完全な道具に一生悩まされ続ける運命にあるのです。

## 究極の国際コミュニケーション道具とは

---

そもそも“International Communication”とうたうのであれば、その名が示す通り、世界中どこに行っても意志疎通が可能となる「道具」であるべきだと思います。

その点、英語を含め、全ての言語には絶対的な弱点があります。それは、『言語を理解していなければ、絶対に使えない』という現実です。

私の考える国際コミュニケーションの道具というのは、以下の3つの要件を満足しなければならないと考えています。

- (1) 勉強を必要としないこと:ある国の教育水準や、個人の資質に依存するコミュニケーションでは意味がないのです
- (2) 直感的であること:プロトコル(規約)があるものは、コミュニケーションの道具が複雑になってしまうからです
- (3) 簡単であること:誰でも使えなければ意味がないからです

私は、この3つの要件を満たす可能性のあるテストとして、“TOPIC”を提唱します。

これは“Test of Playing International Communication”、「国際コミュニケーション『演劇』テスト」です。

私は、国外での一人旅で、弁当が欲しければ、弁当を食べているパントマイムを外国人の前で演じましたし、空港へ行くときは飛行機が飛んでいる様子を、両手を広げて走り回って表現したものです。お願いする時は手を合わせて懇願し、怒りを表わす時には「お前だ。お前が悪い」と、相手を指さすことに躊躇(ちゅうちょ)しませんでした。

このように、私の考える究極の国際コミュニケーションの道具とは「演技」なのです。

## 「TOPIC」の全容

---

私が提唱するTOPICの問題は、次のような構成となります。

設問1 写真を見て、彼女が泣いている理由を(イ)～(ニ)から推測しなさい。

- (イ) 彼女は失恋して泣いています
- (ロ) 彼女は上司に叱られて泣いています
- (ハ) 彼女は泣いたふりをしているだけです
- (ニ) 彼女は実は男なのです

設問2 ビデオをみて、彼が何を言いたいのか考えなさい。

- (イ) 彼はおなかが減っています
- (ロ) 彼はおなかが減ったふりをしています
- (ハ) 彼はおなかが痛いです
- (ニ) 彼はおなかが痛いふりをしています

言葉を超えるコミュニケーションが必要な場面では、相手の考えていることを正しく推測できこそ、“国際コミュニケーション”であると言えるでしょう。

このような、“状況を客観的に判断するテスト”の後は、実技テストになります。

実技テストは、当然実際に演じなければなりません。そしてその演技は、世界のどこに行っても通用するユニバーサリティが要求されるのは言うまでもありません。従って、この実技テストはメディアあるいはインターネットを介して、世界の1000人を超える審査員に映像で一斉に同報され、審査結果が即時に集計されるシステムの利用が前提となります。



受験者には、次のような設問がその場で与えられ、カメラの前で直ちに演じることになります。

設問3 次のシーンを演じなさい。

(イ) 橋の上で彼を待っている28歳女性が、トイレに行きたいのを我慢している様子を演じなさい(制限時間15秒)

(ロ) 31歳の彼が遅れて現れた時に、彼女が感じた安堵感と、生理現象を我慢している苦痛が、彼に対して怒りの形で現れた様子を演じなさい(制限時間30秒)

(ハ) 彼女が怒っている理由が分からず戸惑っている彼と、程なくその理由を理解したけれど彼女にそれを気付かせない彼の振る舞いを演じなさい(制限時間30秒)

一方、世界の1000人を超える審査員にはあらかじめ次のようなアンケート用紙が用意されています。

演技者の演技の内容について伺います。

(1) 受験者の演じている人数は何人ですか。

- (イ) 1人
- (ロ) 2人
- (ハ) 3人
- (ニ) 4人以上

(2) 受験者が演じている女性の年齢を推測してください。

- (イ) 15歳未満
- (ロ) 15歳以上～25歳未満
- (ハ) 25歳以上～30歳未満
- (ニ) 30歳以上

(3) 彼女の心の動きを時間順に推測してください。

- (イ) 苦→怒→哀→楽
- (ロ) 哀→楽→怒→喜
- (ハ) 苦→喜→怒→哀
- (ニ) 苦→喜→哀→怒

(4) 彼女の最初の振る舞いの理由を次の中から推測してください。

- (イ) 考え事
- (ロ) 空腹
- (ハ) 怒り
- (ニ) 生理的欲求

このアンケートを集計し、正解を多く得た受験者こそが、正確なコミュニケーションを行うに足る演技ができたことになるわけです。

このようにTOPIC——Test Of Playing International Communication——は世界共通にして最高の有効性を持つ普遍的なコミュニケーションを、客観的に測定するテストであり、前述した3つの条件

- (1) 勉強を必要としないこと
- (2) 直感的であること
- (3) 簡単であること

を満たしていると確信しております。

しかし、このTOPIC方式(演技によるコミュニケーション)にも欠点があります。

それは、コミュニケーションの場所と時間が制約されるということです。紙やファイルのように一度に多くの人に伝達できませんし、何より保存ができません。これは、決定的な「弱み」です。

それでも、私は、全世界共通のコミュニケーションの道具として、TOPIC方式をお勧めしたいのです。その有効性に関しては、非英語圏の国々を歩いてきた私が保証します。皆さんには、日々、演技の練習に励んでいただきたいと思います。

## TOEICの点数アップ=国際コミュニケーション能力アップなのか

---

最後にちょっと真面目な話を。

TOEICが、英語によるコミュニケーション力を「計測する手段」として有効である、ということには同意します。

では、逆から考えてみましょう。

TOEICのスコアを上げる勉強をすると、国際コミュニケーション能力は向上するのでしょうか。

私は今、プライベートで「TOEICのスコアアップを目的とした講座」を受講しています。この講座の目的は、「国際コミュニケーション能力を上げること」ではありません。講座では、TOEIC受験のときの時間配分や、消去法、推測といったさまざまなテクニックを伝授してくれます。特に文法などは、精緻にルール化されていますので、エンジニアには理解しやすく、TOEICスコアに反映されると思います。



さて、私が知りたいのは、こういう勉強(TOEICでハイスコアを取るためテクニック)が、国際コミュニケーション力の向上に役に立っているか、という点です。

はっきり言って――役に立っていないと思う。

TOEICのリスニングとリーディングは、コミュニケーションを「アシストする力」を測ることはできますが、コミュニケーション力をテストすることはできないと思います。

本当に外国でコミュニケーションをしたいのであれば、この連載コラムで紹介した、狡猾、卑劣、懐柔、トラップ、どう喝、ハツクリ、泣き落とし……、その他、ありとあらゆる、えげつない方法でコミュニケーションを謀る……もとい、図る手段の方が役に立つと、私は信じています。

しかし、私は、「TOEICが全然役に立っていない」とまでは思っていません。

仮にTOEIC向けの勉強をすることで、長文を読む時間が半分になって、相手のしゃべっている内容を理解できる量が10%でも高まるのであれば、それは素晴らしい成果です。

また、TOEICというテストを受ける以上、誰であれ、少なくとも勉強するでしょう。単語や例文の暗記くらいはするかと思います(テスト直前に慌てて)。これは、現状のあなたの英語力を「劣化させない」手段にはなるはずです。

そう考えると、TOEICの存在意義とは「ハイスコアを取ること」ではなく、「受験を続けること」にあると思うのです。

つまり、倦怠(けんたい)期の恋人同士のごとく、または離婚に踏み切れない夫婦のごとく、「英語とダラダラと付き合い続ける」ということです。

そのように考えれば、われわれ「英語に愛されないエンジニア」のTOEICに対する取り組みは、

- (1) 必ず受験する
- (2) 戻ってきたスコアは、見ないでゴミ箱に捨てる
- (3) 上記(1)、(2)を、繰り返す

で、必要かつ十分なのです。

この連載コラムにおいては、TOEICとは、

- (1) 日々われわれエンジニアから、嫌われ、疎まれ、憎まれながら存在し続け
- (2) 「受験し続けること(=負け続けること)」自体が「受験の目的」である

テスト、と位置付けたいと思います。



写真はイメージです

□

最後に、エンジニアを雇用する全ての企業、特に製造業の幹部や上司の皆さんに申し上げたいと思います。

「技術トレンドは予見できない」というのは、この業界の常識です。

そのような暗中模索の業界の中で、企業が生き残るために必要な人材とは、「暗い未来を予見して、理屈をつけて行動しないエンジニア」ではありません。

必要なのは、何度でも何度でも「負け続けることができるエンジニア」——よく言えば「メンタルが強いエンジニア」、悪く言えば「何も考えてないエンジニア」——であるはずで

エンジニアの仕事は、「負けること」の繰り返しでもあるからです\*2)。

\*2) 例えばわが国では、特許出願数に対し、特許されるのは30%、自社実施されている特許発明は3~5%、ライセンス許諾や侵害訴訟できるのは0.3%程度という見解がある(参考文献:[「弁理士ただいま工作中」](#))

□

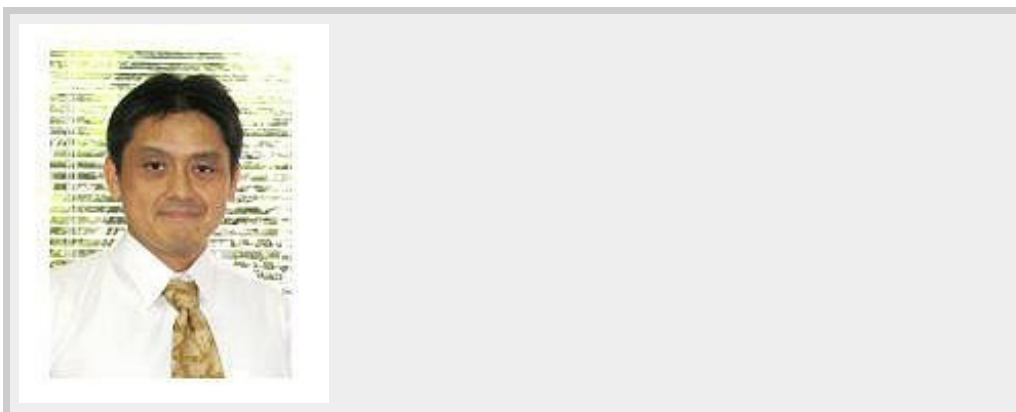
今回の番外編では、前編と後編の2回にわたり、TOEICと「TOPIC」について私見を述べてまいりましたが、つまるところ、私が申し上げたいのは

「何度も負け続ける私(江端)のことを、みんな、もっと大切にしよう」

ということになります。

---

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



## Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

## 関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright © 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

